



U-35委員会企画
talk baton 15 活動報告

talk baton とは…
若手プラットフォームづくりの活動の一環として、建築を取り巻く他分野のゲストがトークのバトンを繋げていくコミュニケーショントークイベントです。
建築をフィールドとする私たちと毎回のゲストとの対話を通じて、建築が本来持っている多様性やバイタリティを見つめ直し、これからの建築に求められる領域を探っていきます。

U-35委員会Facebookページ
活動内容やメンバーの雑感などざっくばらんに情報をアップしています。ぜひ一度立ち寄りください。
<https://www.facebook.com/U35.aaj>



フラワーショップの様子



地下鉄四ツ橋線肥後橋駅から徒歩10分。個性を放つレストランやアトリエ、オフィスが建ち並び京町堀の一角、雰囲気漂うオシャレなフラワーショップが今回の会場。カフェのような落ち着いた空間に適度な照明、ぎっしりと活けられた花々が印象的だ。今回はトークと合わせて、花を使ったワークショップを行う。普段建築の図面を描いている参加者は花を使ってどのような表現ができるのだろうか。参加者の9割が男性という異様な雰囲気の中トークバトン15『建築と花』はスタートした。ワークショップは①花を選ぶ、②花瓶に活ける、③花束のラッピングの3つの手順で行われた。
■Step①・・・花を選ぶ
今井「好きな花10本を選んで花束を作ってください。」課題説明は一言で終わった。カウンターに並べられた20種類程度の花から、10本選んで花束を作るという非常に簡単な作業だ。しかし参加者はカウンターに近づくと、なかなか1本目に手が出ない。
今井「皆様のセンスが問われます。」その言葉に参加者の手が止まる。条件もきっかけも無い中、花を使って何かを表現しなければならない。参加者は花束のコンセプトや色、形、



Step① 花を選ぶ

バランスを考えながら手を動かし始める。
今井「皆様、バラは選べないんですね。1人も選んでいないところが意外ですね。」参加者は、個性が強いバラは選ばなかったようだ。そうこうしている間に10本の花の選定は終わり、花束を作る作業に移った。
今井「スパイラルの基本の束ね方から説明します。麻ひもを1本ずつとってください。出来上がりをイメージしながら、テーブルにお花を並べてください。手で持つところに葉っぱがあったら、ハサミで落としてください。スパイラル状に束ねます。バッテンにならないように同じ方向に巻きます。」説明内容は理解できるが手がついていかない。戸惑う参加者に対して、スタッフが個別指導を始める。
今井「このスパイラルにするとお花が100本でも200本でも束ねていけます。」花束をつくる上の基本的な作業であり、実演しているスタッフは慣れた手付きで作業をこなす。参加者は見様見真似で花を束ねていく。徐々に顔付は真剣になり、渡す相手の顔を思い浮かべながら丁寧に花の見せ方を調整していた。
■Step②・・・花瓶に活ける
完成した花束を花瓶に活ける作業に移った。形の異なる花瓶が数種類用意されており、それぞれコンセプトにあった花瓶を選定する。
今井「いいなと思う向きを作ってください。」それぞれの感覚で良いと思う花の見せ方を探った。花瓶に活けると花の表情が変わる。
今井「こういうのを入れるとどう・・・ニュアンスいいでしょ。」参加者が設えた花瓶にヒョロとした主張しない小さな葉を添えたらどうかとアドバイスした。それを花瓶に沿わせることで、参加者が作った花束の表情を活かしつつ、全体のバランスが良くなった。



Step② 花瓶に活ける

■Step③・・・花束のラッピング
今井「今日はこの花を持ち帰ってもらうのに、ラッピングをやってもらいます。ラッピングの紙を配るので一緒にやっていきましょう。」花の切口を覆うためのアルミホイルと、ラッピングのための淡いグレー、ブラックの2枚の薄い紙が配布され、花束をラッピングした。参加者「花屋で活けてもらうのは本当に綺麗だけれども、自分で選んだ花をラッピングして完成すると愛着が湧く。」自らが作った作品への満足感と、渡す相手の喜ぶ顔を想像する期待感が溢れてくる。そして自ら作った花束のコンセプトを皆の前で発表した。参加者は花束をプレゼントする相手を述べ、季節、結婚記念日、友人への思い、家族への思い等・・・花束のデザインのきっかけを説明した。
■フラワーデザインをはじめたきっかけ
今井「美容師のとき、帰り道の公園を歩いているとアジサイが咲いていて、毎日通る度に色が変わってくるんですよ。街灯でアジサイが照らされると薄い白っぽい色になり、次にいったときにはブルーになっていました。それがあまりにも綺麗で・・・そこから花に魅かれたのがきっかけですね。」装飾された花ではなく自然に咲いている花との出会いがフラワーデザインを始めたきっかけとなった。
今井「それからカルチャーセンターに行ってお花を触ってみたくんですけどイメージとはかけ離れていて。アジサイ一本あればすごく綺麗なのに、お花の組合せでこんなにも良さが失われるということに衝撃をうけました。」花本来の美しさをそれらの組合せで如何に綺麗に表現できるかということを思考する中で興味が深まったと語る。間もなく独立、3坪の花屋からスタートし、花屋を経営する中でブライダル業界に関わるようになった。



Step③ 花束のラッピング

■クライアントの要望を形にする
今井「結婚式は、新郎新婦の要望を聞きながらイメージを考えます。例えば優しい感じとか、フワフワした感じとか、それをちょっとずつ詰めて、具体的にどんな花を使ってどんな風にするかということまで、1時間半の打合せで形にしないといけないですよ。それは結構ロープレして、練習しないと形にするのは困難です。」クライアントが思い描くイメージを基に短時間でデザイン提案する必要がある。建築では決定したものを図面表現できるが、フラワーデザインはクライアントとのイメージのやりとりになるため、ヒアリングの場がより重要視される。
今井「イメージしてもらうために過去の写真を見てもらいますが、同じ花を使っても同じものが出来ないの、こんな感じでと言われてもコピペは出来ないと伝えています。」同じ花でも表情が異なり、また式場によっても装飾の仕方が異なる。建築と同様、フラワーデザインについても一品生産となるため、完成イメージを伝えるのに工夫が必要である。
今井「結婚式のお花の装飾は数人で行うため、打合せで使った写真やスケッチ等を貼りつけたコンタクトシートを何枚もつくってイメージを共有します。」コンタクトシートが会場作りの設計図となる。建築の図面と比較すると抽象的で色鮮やかなスケッチ等で表現される。
今井「結婚式は新婦さんが可愛すぎます。その瞬間が頂点だと思っています。その瞬間にお花やブーケをデザインさせてもらえるのは、やっぱり幸せです。」クライアントにとって一番大切な瞬間のデザインに関わるプレッシャーとその瞬間に込められた思いを最大限に花で表現することにデザイナーとしてやりがいを感じているのだろう。



コンタクトシート

■独自の感覚でデザインする
今井「公園に咲いているお花はどれも綺麗。自然にあるものは全て良く見えます。」花が咲いていて、それが綺麗だと感じることは、皆共通の感覚だろう。その感覚を最大限尊重する姿勢がトークの中でうかがえた。今井氏がデザインする花束は、透き通る色合いで生き活きとした印象を受ける。それは花を単なる装飾するためのツールとして扱うのではなく、生きた花を集合させた絶妙なバランス感覚でその表情が完成するのだと感じる。ワークショップの際、今井氏の説明は抽象的で、どうすれば花が綺麗に見えるのか、どんな組合せが良いのか等、デザイン論は多く語らない。型や理論に嵌め込まれたデザインではなく、自然にあるものをベースに、今井氏独自の感覚でアレンジすることで、皆が共感できるものになる。今回のワークショップでは、フラワーデザイン未経験の参加者が当日課題を聞き、自らが綺麗だと思う花束を作り上げた。普段取り組んでいる建築から離れ、独自のフレッシュな感覚でデザインに取り組めたと思う。建築設計の自動化が進む中、設計者（デザイナー）として、この独自性が求められるのではないだろうか。

talk baton 15 を終えて

ワークショップで作成した花束は、各自家に持ち帰り、家族や友人にプレゼントした。自らデザインして作り上げたものを誰かにプレゼントし、喜びを与えることは非常に嬉しい出来事である。建築設計も同じで、そこにモノづくりの楽しさがあるのだとあらためて実感した。

対 談 日：2018.11.14
場 所：Isely OSAKA（大阪市西区）
モデレーター：平岡 翔太（大建設計）



今井氏と花束を持つ参加者